博士論文要旨

論文題名：ネオリベラリズム概念の変遷に関する知識社会学的研究

立命館大学大学院社会学研究科
応用社会学専攻博士課程後期課程
シモムラ　コウヘイ
下村　晃平

本論文の目的は、ネオリベラリズムという用語の使用状況をマッピングすることによって、同用語を使用する人びとの間で共有されている問題意識とその変化を明らかにすることである。

「ネオリベラリズム」は、1970 年代以降の現代社会の変容を理解すための重要概念とされ、近年では、ネオリベラリズムを主題とする研究が学問領域を横断して毎年 3000 本以上刊行されている。しかし、他方で、同用語については、その意味と妥当性をめぐって多くの議論を生み出しており、実体のない空疎な概念であるという批判も見られる。ネオリベラリズムの時代を終わらせることが世界的な課題として共有されている現状において、同用語は、その重要性にもかかわらず、曖昧なものであり続けており、その学術的な整理が強く求められている。

本論文ではこの課題に取り組んだ。具体的には、同用語をめぐる問題を（1）自称の問題系：ネオリベラルとされる人びとは使用しないこと、(2) 他称の問題系：あらゆる対象に「濫用」されていることの二点に整理し、思想の「生産・流通・受容」の過程に注目する、近年の知識社会学的研究の視座から、単語の使用に注目して、同用語の使用例を通史的に辿った。

本論文は、この二つの問題系に対して以下のことを明らかにした。まず、自称の問題系については、ネオリベラルたちが、自称として「ネオリベラリズム」を使用する際、そこには常に、リベラリズムとの差異化という問題意識が常に存在したことが明らかとなった。

しかし、このことは逆に言えば、そうした状況が変化したのであれば、同用語を使用する必要性がなくなることを意味した。英米グループのネオリベラルたちが、同用語を徐々に使用しなくなった背景には、古典的リベラリズムとの差異化よりも、その連続性を標榜するように問題意識が変化したことがあった。世界大恐慌が過去の記憶となり、共産主義陣営との冷戦という状況下においては、リベラリズムの正統性を確立することが課題であった。

このことは、またネオリベラルたちの運動内部においても同様であった。古典的リベラリズムの刷新という共通の問題意識が失われたときに、同用語を使用する必要性もまた失われた。英米グループのネオリベラルたちは、同用語の使用を止めた。また、ドイツ・グループのネオリベラルたちは、別の用語で自認するようになった。フランス・グループのネオリベラルたちは、学派を形成することがなかったために徐々にその存在感を失っていった。

他称の問題系については、「ネオリベラリズム」という用語が使用されることが一般化する背景には、その他の用語が徐々に使用しづらい状況が生まれたことが、その背景にあった。

1980 年代には、イデオロギーとしては新保守主義などの用語が主に使用され、政策面でも、サプライサイド経済学やマネタリスト哲学などが使用された。しかし、1990 年代に入り、グローバル化の進展の下で政治経済状況が大きく変貌した。保守政権だけでなく、中道左派政権においても、貿易の自由化や国有企業の民営化などの政策が継続されて実行されたことは、「新保守主義」が、社会状況を説明する名称として相応しくないことを意味した。

結果として、「ネオリベラリズム」が、市場原理主義や自由放任主義への回帰を意味する用語として定着していくことになった。しかし、同用語が広く認知され、使用される対象が、経済政策のイデオロギーから地理的、政治的、文化的、歴史的なさまざまな対象に使用されるようになったことは、同用語が「濫用」されているという疑念を高めることにもなった。

この他称の問題系（ネオリベラリズムという用語の「濫用」）に対して、本論文では、英語圏のネオリベラリズム研究において共有されている問題意識を明らかにすることによって、同研究が（1）ネオリベラルたちの主張を脱自然化し、（2）ネオリベラリズムを自由放任主義への回帰や市場原理主義と同一視する一般的な理解を相対化していたことを示した。

こうした本論文の作業は、政治的分極化が叫ばれる昨今の社会状況において、ネオリベラリズムについて学術的な議論をおこなうための共通の土台ないし前提を提供する点において意義がある。また、ネオリベラルたちの実際の言説と彼らの制度的・人的ネットワーク、そして社会状況を重層的に記述することで、彼らの問題意識の変化を明らかにしたことは、政治思想史研究に対して貢献をなしている。